

A misty, atmospheric photograph of a train station. In the foreground, a dark wooden upright piano sits on a wet, reflective platform. In the background, a train is visible on the tracks, and several tall, slender lampposts line the platform. The scene is shrouded in a thick mist, creating a sense of solitude and melancholy.

十の停車駅をめぐる物語

Il treno delle ore perdute

(The Train of Lost Hours)

(失われた時間の列車)

STEFANO JEFF BLUES

逃した機会、口にされなかった言葉、車窓の向こうに残された人生をめぐる旅。停車駅を重ねるごとに、旅人はひとつの簡素な真実へ近づいてゆく。時は過ぎ去ったものを返してはくれない。けれども、残されたものにどう住まうかを教えてくれる。

人の一生に一度だけ、
現れる列車がある。
それは普通の線路を走らない。
失われた時間のなかを走ってゆく。

どの車両にも、
置き去りにされたものが眠っている。
告げられなかった愛、
投函されなかった手紙、
下されなかった決断、
行かれなかった旅、
忘れられた約束。

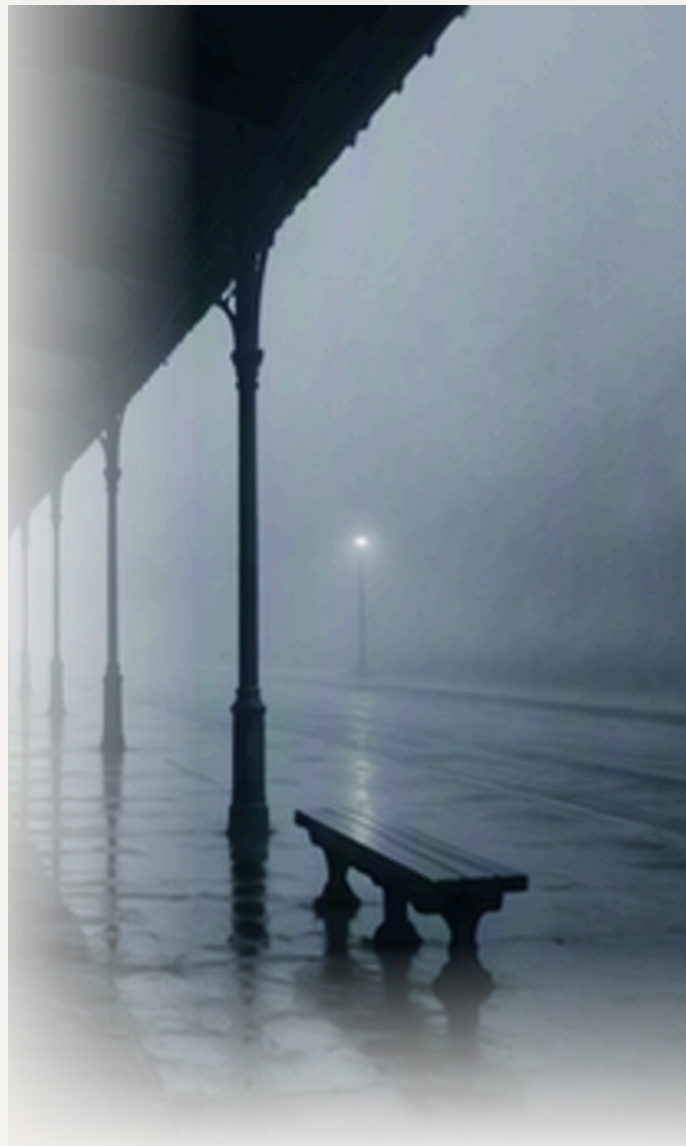
これが、その旅である。

La stazione senza orologi

(The Station Without Clocks)

(時計のない駅)

ある夜、男は訪れた記憶のない駅に立っていた。時計も、発車標も、旅人もいない。霧があらゆる地平を消している。ベンチは何十年も誰かを待ちつづけているようだ。ホームを歩くうちに、どの標識にも名前がないことに気づく。立ち去ろうとしたとき、遠くにひとつの光が現れる。音もなく近づいてくる列車だ。彼は初めて、自分が偶然ここに来たのではないと悟る。





Ultima chiamata

(Last Call)

(最終の呼び出し)

拡声器から金属的な声が響く。行き先を告げるのではなく、ただ一言だけ——「最終の呼び出し」。ほかに聞いている者はいないようだ。扉がゆっくりと開き、車掌が戸口に身じろぎもせず立っている。男はためらう。乗るということは何かを手放すことだと知っている。それが何かは分からないまま。車両に足を踏み入れると、風景は霧に消え、駅はすでに遠い記憶のように彼の背後に残される。

Il vagone delle parole non dette

(The Carriage of Unspoken Words)

(語られなかった言葉の車両)

車両は空なのに、空気のなかで幾千もの声が響いている。途切れた言葉、終わらなかった告白、投函されなかった手紙。どの言葉も、それを口にする勇気を持てなかった誰かのものだ。その声のなかに、男はひとつを聞き分ける。自分自身の声だ。ついに告げられなかった愛の言葉、喉の奥にとどまった許しの願い、言えなかった別れ。どの一言も、いまだ解き放たれるのを待っているように思える。





Venti euro per il destino

(Twenty Euros for Fate)

(運命に二十ユーロ)

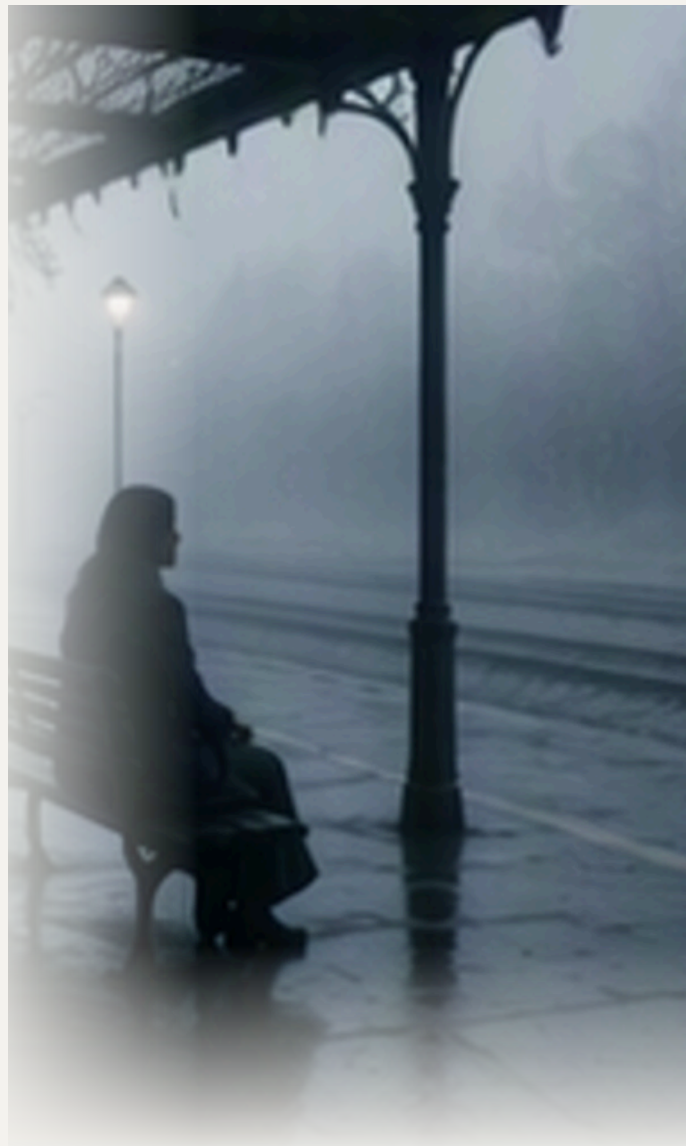
次の車両を通り抜けながら、男はありふれた品々を目にする。しわくちゃの領収書、一枚の硬貨、列車の切符、半分残されたピッツァ。運命が変わるのは大きな出来事の時だけでなく、取るに足らないように見える細部においてでもある、と車掌は説く。数分の遅れ、何気ない選択、考えもせずに入り込んだ道。どの品の背後にも、あり得たはずのまったく別の人生が隠れている。

La donna del binario zero

(The Woman on Platform Zero)

(零番線の女)

列車は小さな駅の手前で速度を落とす。灯のともる庇の下に、見知らぬ女がひとり座っている。視線が交わったとき、男は説明のつかない感覚に襲われる。会ったことはない。それなのに、彼女を知っている。遠い日にもし違う決断をしていたなら、あの人は自分の人生の一部になっていた——車掌はそう明かす。列車は再び走りだす。その姿はホームに動かぬまま、やがて霧が消し去る。





Il controllore

(The Conductor)

(車掌)

ついに男は車掌に話しかける勇気を見いだす。制服をまとったその姿は古い眼差しを持ち、彼の人生のすべてを知っているように見える。車掌が検めるのは切符ではない。悔いである。忘れられた出来事、失われた人々、一度も歩かれなかった道を読み上げてゆく。裁きもせず、慰めもしない。ただ、置き去りにされたものを記録するだけだ。立ち去る前に、彼は謎めいた一言を残す。「誰も時間を失いはしない。時間のほうが、我々を保っているのだ」。

La città che non ho visto

(The City I Never Saw)

(見なかった街)

車窓の向こうに、光の川が幾筋も流れる巨大な街が現れる。建物も、通りも、広場も見覚えがある。もし何年も前に旅立つ勇気を持っていたなら、男が暮らしていたはずの街だ、と車掌は説く。どの窓の向こうにも、彼の存在の別の版が展開している。すべてを眺めることはできるが、足を踏み入れることはできない。街は列車のかたわらをゆっくりと流れてゆく。止まることを拒む夢のように。





Fermata: ieri

(Stop: Yesterday)

(停車駅：昨日)

列車は、時に朽ちた一枚の標識の前で止まる。そこにはただこう書かれている——「昨日」。扉が初めて開く。男は降りようとするが、見えない力が踏み段を越えさせない。ホームには自分の過去の情景が見える。過ち、喜び、逃した機会。すべてが数メートル先にありながら、なお手の届かないままだ。その瞬間、彼は理解する。過去は思い出することはできても、二度と住まうことはできないのだと。

L'ultimo vagone

(The Last Carriage)

(最後の車両)

列車の最後尾には、誰もが避ける閉ざされた扉がある。ようやく開けたとき、男は自分の最も大きな悔いがそこにあると思っていた。ところが車両はまったくの空だった。品物もなく、記憶もない。あるのは沈黙だけ。その中央に、一枚の鏡が立っている。近づくにつれ、彼は悟る。この旅が問うていたのは失ったものではなく、いまなお探しつづけているものだった。初めて彼は、郷愁も恐れもなく自分自身を見つめる。





停車駅 10

10

Le ore ritrovate

(The Hours Regained)

(取り戻された時間)

夜明け、列車はすべてが始まった駅へ戻ってくる。霧がゆっくりと晴れてゆく。男はホームに降り、列車を振り返るが、車両はすでに消えかけている。その瞬間、彼は悟る。旅のあいだに見たどの時間も、失われてはいなかった。どの過ちも、どの断念も、どの逃した機会も、いまの自分という人間をかたちづくってきたのだ。列車が消えるとき、駅はついにひとつの名を取り戻す——「現在」。

過去は眺めることはできても、そこに住まうことはできない。いっぽう
現在は、名を与えられるのをいまでも
待っている。

Il treno delle ore perdute

(The Train of Lost Hours)

(失われた時間の列車)

十の停車駅をめぐる物語

ARTIFACT N°. 110

ALL RIGHTS RESERVED © 2026

Stefano Jeff Blues